

これはどういふ譯かと云ふに、この妙味といふのは、町人臭いといふところにある。何ともいへぬへりくだつたところがある。頭の低いところがある。どうも何々大學を出て来たとか、高等商業でも出て来ると云ふ様な人の中には教育のない奴に頭を下げるは馬鹿らしいなど云つて首の骨がイヤに固くなつて来る人もある。終には仕方がないから、僕は人間には頭は下げぬけれども、金に頭を下げてやるといつて居る様な者も二十年ほど前にはあつた、今日ではそんな人は殆どないが、この町人の町人臭いのが奥床しいのは、只謙の一字にある、謙といふことは廣義に味はつて見ると、頭を低げるばかりが謙でない、へりくだるだけが本當の謙ではない、一萬圓の資本のある人が七千圓までへりくだつて商をする、スツカリ間違つても三千圓

の餘裕が残る、さういふものでなければならぬ。十杯飯を食ふ人が八杯で謙遜してをけば、お醫者様に掛らずに濟む、それはさうだが九分の言葉にツツはなしと云ふことがあるが全くそつはない事である、町人の町人臭いのは、坊主の坊主臭いよりも、學者の學者臭いよりも奥床しくて何んともいへん好い心持がする、番頭さんや丁稚さんが知事臭かつたり郡長臭かつたり、主人が大臣臭かつたりしては商賣は成功せぬ。矢張り町人は町人臭くなくてはいかぬ。商法家の奥様が昔の殿様の夫人の様では商賣は調子が悪い、「御免下さい」「何の用事か」それでは商賣は繁昌しない。町人の奥さんは矢張り町人の奥様らしくなければならぬものだ。近頃は、どうも高等の教育を受けた御婦人方が商人の家内になつても、こんな事は「妾の理想で

ないのよ」となんて貴婦人臭くていかん。矢張り商賣人は商賣人らしくなければ味ひがない。それといふのが、即ち謙の一字にある。商賣家は謙でさへあれば敵はない、算盤の上ばかりではない、凡ての起居動作の上に於て、謙であつたならば最後の勝利を得ることは請合である。實際に上からカツと動くよりは下からゆく方が得である。

私は劍道のこととは知らないけれども、芝居でよく見るが、敵討をするのでも、仕舞にまけて殺される奴は始めに是非大上段に振翳る、勝つ奴は下からゆく、何でも殺されて了ふ奴は己れ糞つと、上からゆくが、上から行く奴は暫くする内に疲れて了ふ。それだから負ける、下からおとなしく行つてゐる奴は長く續く、それだから最後の

勝利を得る。矢張り商賣家もこの通りであらうと思ふ。然してこの謙といふことは商賣家だけに用ゆべき機合で、佛教者の用ゆべき機合でないかといふに、佛教者はそれ以上のことをいふ。即ち無我の人といふことがある。無我ほど優れた謙遜はない。私共は頭を叩かれたらブツ／＼いつて怒るが、無我ならば決して天下に敵はない、恰も商賣家が謙なれば天下に敵なきと同様である。さうして見ると商賣家の活用する機も、佛道修行者の活用する機も變りがないといふことが分るのである、然らば機關はどういふ處にあるか。

□如何にして道を辿る

これを辿つて行くのに行き方が悪いと飛んだところに這入て了ふ。

人が拵へて置いた道ならば、只歩いて居れば行けるけれども、こればかりが道ではない、商法家にしても、佛教修行者にしても、從來ある通りの道を行くのも道なれば、又、時に應じて新しき道を開拓して行くのも道である、今日吾々僧侶は、殆ど六百年前の古い道を辿ることさへ覺束なくやつて居るやうな次第であるが、それは吾々僧侶が遅れて居るので、諸君が進んで居るといふのは其處だ、吾々は行基や弘法がよい道を開いて置いて呉れたところさへ、まだしつかり進めないといふ情ない仕末だが、商法家が勢力を得たならば、道なきところを刈り分けて、社會の先覺者となり、自分も利益を得他人にも利益を與へて行くやうな道を開いて立派な成功者の位置まで到達せねばならぬ。先きに行つた人は男爵になつて、後から行つ

た人は損をする、古川市兵衛とか、森村市左衛門とか云ふ人が男爵になつたと云ふが、彼等は皆當時の社會の先覺者となつて、眞先きに立ち荆棘を切開いて後人の爲めに坦々たる大道を造り後人の進路を平易ならしめたからである。故に先きに行つた人は利益を得て男爵になつたけれども、後から行つた奴は何にもならない、素寒貧だ佛教の祖師方のおやりになつたことも皆さうである。何れにしても比較對照して見ると、商業の先覺者、佛教の先覺者、古の偉人のやつたことは、皆精神的の先覺者となり、物質的の先覺者となつて居る。然して物質が先きか、精神が先きかといへば、それは矢張り精神が基本になつてゐたことは疑ふ餘地がない。先覺者のみに止らず凡て事業を成すには精神が第一に立つ者である。假に諸君が喧嘩を

するとして、豈夫これから喧嘩をしますといつて、立合ふものはない、疝癩を起して横面を張り倒すけれども、これは物質の腕が先に横面を張倒して、精神が後から起つたかと言へばさうではない必ずムラ／＼と疝癩を精神に起して、其から腕に力が入つてコツンと行くので、無意識で頭を叩くことは決してない。オヤ頭を叩きましたか、失禮なことを覺へず手が致しました、と云ふものはない。それと同じことで苟くも此の人の行かないところの道に進んで行くといふのには、矢張り精神が無我となつて進み、無我を根抵として謙遜の徳が表はれ、さうして佛祖の道の如くに、大慈悲心を以て、斯くすれば社會の爲になるにきまつて居る。斯くすれば人類の爲に利益になるだらう、斯くすれば社界全體の利益になるだらうといふ

親切が根抵の機關となつて動くのでなければ不可能である、只無暗に人の行かんとところを行き活動さへすれば、偉いといふのではないそこが大切なことである。其の道の行き方機關の轉じ方の上手と下手とに依つて、利益を得る人と得ぬ人とがある。

□利益は近きにあり

世間では大きな遠いことばかりを喧しく云ふけれども決してさうではない、まだ／＼手近いところに幾らも利益があるだらうと思ふ、諸君のやうな物質を専門としてゐる人が、算盤を活用して、社會を達觀したならば、手近いところに幾らも利益の種はあるだらうと思ふ、一例が此間も電車に乗つて、その中で、小さい書物を読んで居

た。此の書物が一枚切れて居らぬところがある。指で切ると大きく破れる、燐寸も持つて居らず、楊枝も持つて居らず、何にも持つて居らぬ、何で切らうと考へて居る内に、電車の切符があつた、嵐山まで、だから小さい札が三枚あつた。其の三枚を合せて、ナイフの代りにして切つたら、うまいこと切れた、而かも電車の切符は損まぬ、其時私はそう思つた。これで紙を切つても電車の切符は破損せず、又、電車の切符で本の破れて居らぬところを切つたならば、法律違反といふこともまだない、決して不都合はない、そうして非常な利益を得た、それで電車賃が高くなつた譯でもない、面白いものだ、この通りに世の中には、随分活用すれば間に合ふものが澤山ある、電車の切符一枚でも、之を利用するときは切符の用も足れば、

鉄の代りにもなる、大した働きた、世の中の人が頻りに不景氣で困るとか、商賣がないとかいつて不平をいつて居るが、もう少し細かい處に着眼したら、面白いことが澤山あると云ふことを、つくづく思つたが、全くこの通りで、注意のしやうによつてどんなことでも役に立つ事があるだらうと思ふ。

河村瑞軒といふ人は、天下の御用達をした、又天下の請負をした人で、今で云へば藤田組ぐらゐの事業をやつて居つた、何百人といふ人を使ふといふ大財産家であるが、ある時、勝手に行つて、下女が御飯を炊いて居る所を見たら、薪が一本燃えさして外に出て居つた河村瑞軒が「何だ、こんな事をして勿體ない」といつたら下女が面を膨らせて、「一體こんな大家の旦那が薪一本で小言をいふとは何たら

う、といつて舌打をした、「コレ、さう小言をいふな俺は何萬人といふ人も使へば、何百萬兩といふ金も使ふ時には使ふ、富士山の絶頂に上つて見ると、東海道が一面に見える、あれをスツカリ填めさして田地にしたならば、どれほど利益があるか知らん、と思ふ又た竈の前を通る時に、木の葉一枚落ちて居つても燃えると思つたら拾つて歸る、これが俺の心ぢや、腹が立つたら許して呉れといつたそうだが、斯ういふところがなくてはならぬ、富士山絶頂から眺めて東海全體を新田に開拓しやうかといふ大なる抱負もなければならん、又一面には道端に落ちてある枯枝を拾つて、薪にするといふやうな細心な注意も拂はなければならん、これでこそ成功することが出来るのである。故に商法家の行く道も、吾々佛道修行者の行く道

も少しも變りはない。故に、商法家が佛敎殊に吾々禪宗の雲水がやつて居る修行の如き精神を以て、社會に立つて行つたならば、餘程面白いことが澤山あるだらうと思ふ、又、日々のことも不平もなく面白くやつて行くことが出来る。商人と云ふ者は只利益を得るだけが天職ではない。只無茶苦茶に樂をしやう、安樂にならう、と云ふ考よりは、毎日此の商人として行くべき道を踏み外さないやうにして、行くといふ心掛を持つたならば、必ず自分の利益を得、他人にも利益を與へることが出来て、圓滿に自利々他の最大機關を成就することが出来るのはきまつて居る。只樂に利益を得やうとするからいけない。斯う云ふと失禮であるが、どうも今日の人間はやはり間然するところがあるやうだ。火鉢にあたつて居る、友達がやつて來

る、「寒いな、何かポロイことはおまへんか」と云ふ、ポロイと云ふことは一體何を意味するか。ポロイと云ふ言葉の内には明らかに何か暴利な儲口はないか、と云ふやうな意味が含まれてゐる。さういふ着實でない精神を持つて居る人が多い之が現代の一般的傾向になつてゐる。炬燵にあたつて寝轉んで居ながら、何か澤山金を儲けやうといふ考に没頭してゐる。それだから、人の顔さへ見れば、ポロイことはおまへんかといふ之は手を拱いて甘い汁を吸ふやうな考といはねばならぬ。働かさへすれば金は何處にもある、商機と云ふことを心掛けて居りさへすれば、どういふことでも出来るものだ。

□四ツ手のランプ

此の間私が三河の方へ行つて、檜山村の定林寺といふ山寺に一泊した、餘り美しくない寺であつたが、そこに四ツ手の大きなランプが燈けてあつた。夜明頃にランプの中で何か騒ぎ出したので、不審に思つて、ヒヨイと見ると、ランプの中に冬の寒むさに堪へかねて此が一匹這入つて苦しんで居る、見て居ると、ランプの口金が焼けて居るところへ飛込んだのだからたまらないグル／＼口金のフチを幾十回となくブウ／＼泣いて廻つて居るけれども何遍廻つて幾許愚痴を云つても出ることが出来ん、ヤケドをしてはブ、手を振つてはブ、／＼足をうごめかしてはブ、／＼あつちへ行つてはブ、二十何遍もブ、をやつて到頭力ら盡き體疲れてブ、／＼と愚痴を云ひながら死んで了つた、其の内に又一匹飛込んで来たが、其

奴はブーンといふなり、一遍に火の中へ飛込んでそれでお了ひになつた、私はそれを目撃して面白く思つた、丁度その時は十二月二十五日の夜、京都でも、東京でも大阪でもブブブ、借金といふ焼傷をして見たり、色々なことをして焼傷をし、十二月の末になつて、妙な手付をして蛇が熱いホヤの中へ這入つてブブ、ブ、といふやうに、何かボロイことはおまへんかブブブ、何か好いことはおまへんかブブブ、と、そんな調子である。年の暮になるた、四手のランブの中へ蛇が飛込んでブブブ……云つてゐるやうに、いくら廻つても、焦つても、免れやうと思つても同じことだ、ブブブ……来月になつたら幾らか楽になるだらうブブブ……。これでは何處まで行つても楽になるものでない。それよりは、ブーンといつて火の中へ飛

込んだ方が賢い、苦しいことも、熱いこともない、斯う云ふからとて死んで了つてはいけない。斯ういふことを聞いて、川にはまつては困る。人間は苦みを別にならうと思ふから餘計に苦しむのである。冬の寒い時に、寒いくで炬燵の中に入つて居れば出る時はないのだから活潑に水をかぶつた方が、後から暖くなつて、氣持がよい斯ういふ調子にやらなくちや駄目だ、借金で困るなら、寧ろ借金の中へ飛込んで了へば樂だ。破産をした人は、多く呑氣な顔をして居る金を返さないでうまくやつて往きたい、利息を負けて貰ひたいと云ふのでブブブ……、何時までも泣いて居るよりは、ブーンといつて一思ひに、火の中へ飛込むといふ勇氣が必要である。これ位の勇氣を振つて、寒中に水を浴びるやうな調子で行けば、借金を脊負つた

儘、氣樂に年を取ること出来る、茲が大勇斷のある處で禪の所謂大死一番大活現成の妙諦である。一思ひに飛込む勇氣が肝要な處と思ふ。「飛込んだ力で浮ぶ蛙かな」といふ、句があるが、仲々味の存する處で、早く苦みを免れやうといつて、ブブブ……いふよりは飛込んだ力で浮ぶ蛙かなと、一思ひに飛込んで了つたら、其力で又浮んで来る、何れから大機に投しても、眞理は同じことであるが、その投じ方が、勇氣のある人は困難を困難と思はない。如何なる困難でも決して狼狽えない、山中鹿之助は、三日月を拜んで、「七難を授け給へ」と云つた。斯ういふ勇氣を持つならば世の中に困難なことはない如何なる困難でも通り抜けて、さうして本地の風光を省るとき其所に面白いことが出来る、この力を得るには、どうしてもこの

町人臭い、所謂謙の徳を發揮致さなければならぬ。

□無我になれ

その根抵には武士道で鼓吹する所の無我、我もなければ人もない、我を滅亡して滅亡し盡せば大なる我と云ふものを發揮することが出来る、私共や諸君の此の身體を佛教では色と云ふ。手もあれば足もあり眼もあれば鼻もある。此の身は四肢五體の總合體では事實上儘かに現存して居るには違ひないが、佛教の上から此の身體の根源實性を詮索して見ると、皆な極微から出来て居つて畢竟之れぞ自分の身體であると云ふ永久に固つたものはない。よくよくその本源を究めて見ると終に空といふ處に歸着して了ふ。「櫻木を打ちわりて見れ

ば何もなし花の種とは何を云ふらむ」で、年々歳々美しく咲きみだれる櫻の木をす々に打割つて見てもこれぞ花の種と覺しき物は何もない、此の頃は時々大風が吹いたり大雨が降つたりして居るが、古歌に、「吹くときは音さわがしき山風も吹かざる時はいつちゆくらむ」とある、天地が震動するかと思はれる様な大風でも止んでしまへば今までの風は何所へいつたであらうと云つて、世界中を探しても見える風の在る處といふものはない。只空気の波動する力に依つて暫く風と云ふものが現はれるのであつて、畢竟するに風そのものはない、けれども、只今は風は少しもないと云ふ中に、斯うして扇子を出して使へば忽然として現れて来る。だが今風が出て来たからと云ふてその風を取り留めやうと思つてもモウ風はなくなつて居るでは

ないか。あるかと思へばない、無いかと思へばある、是れが天地萬象の實相である、斯う吾々の身體を分析して見ると其の自性は元來空である。たとえ分析をしないで、其の儘空であると云はねばならぬ。此の理が解りさへすれば自然に無我の境界に達することが出来る。

□ 夢窓國師と武士

私は只今天龍寺の開山夢窓國師の入寂なされた臨川寺と云ふ寺に住職して居るが此夢窓國師は七朝の國師とも成られて足利時代の七代の天皇より國師號を賜つた國の爲に大に力を盡された方で、天下に夢窓國師を知らぬ人はなかつた程の學徳兼備の高僧であつた。斯様

に國家に取つても、大切なお方であるから、足利の館へでもお出でになる時は始終御駕籠で計り御出になつたのである。元より禪僧の事であるから箇人として私に旅行でもなさる時にはいつも雲水の御姿であつたそうだが、或る時一人の御弟子を連れ信州の中野といふもとのお住居になつて居た所へ歸らうと思つて都を後に東海道をお下りになつて、天龍川へ差掛られたが、此天龍川は大井川富士川と共に東海道の三大河の一つで、何しろ水嵩もあれば、川幅も廣いから能く船待ちをさせられたものであつた。運がよくても、大抵は一時間や二時間は船待ちをする覺悟をせねばならぬ。大水でも出ると、事によつては二日も三日も船待ちをする事もあつた。窓窓國師は一時間ばかりも船待ちをして漸く船に乗られた。所がホンの渡しの小

船であるのに客は一ばい乗り込んで居る、船頭は棹を取つて今船を出さうとする所へ、「オオイ、其船待つた」と云ひ乍ら走つて來たのが一人の武士である。何所ん飲んだか非常に酔うて居る、モウ乗込む場所もない小船の中に無理やりに乗つたが生酔の武士の事であるから誰れとても咎めるものもない。夢窓國師は隅の方へ小さくなつて居らると彼の武士は酒臭い息を爲ながら、斯うバタ／＼と動いて然かもヨロ／＼して居る。そう動きなされると船が動搖ぎます、小船の事であるからお静かに願ひたいと、仰しやると、其武士は、「狭くて困るから邪魔になる奴は投げ出せ」と暗に夢窓國師にあて、云ふ、「コ、に居る坊主などは外へ投げ出して構はぬ」、随分亂暴なことを云ふ奴だ、「貴公はそう仰しやるが少しの間我慢をなされ

ば直ぐに向ふ岸に着きます。私どもはハヤ一時間ばかりも船待ちをして居たのであるから、どうか暫くの間お静かにして居て下さい」と云はれると、「何、静かにして居て呉れい、喧しい、己れは静かに出来ない性分だ、出るく」と云ふて聞かぬ、國師も随分亂暴な人間だと思ひ乍ら別に逆はずに知らぬ振で居られると彼の武士は、「ナゼ出ぬか」と云ひつゝ鐵扇を以て國師の頭を打つた、彼は何所かの乞食坊主とも思つたものであらう、すると頭の皮が少し破れて血が流れた。其のお傍に居た國師のお弟子は非常な腕力家であつた、元は北面の武士で劍術が出来て腕が強い、先刻から此の有様を見て居たが、此の時憤然として、怒りを發し、「お師匠様、今日は御免を蒙ります、此の様な武士を活かして置けば旅人の妨げになります最

早堪忍が出来ません。私は天に代つてこの様な武士を引き裂いてしまします」とくやし涙をはらく流がして云ふと、國師は流れし血を紙で拭き乍ら顔の色も變へられぬ、「お前は此位な事で腹が立つのか」「ちやと申して餘りと云へば傍若無人の振舞であります。御師匠さんに對して斯様な亂暴なことをするとは捨て置き難い奴であります」。國師はニツコリ笑つて「併しこれが佛法の修行ぢやないか。口先ばかりいくら忍辱行など云つてもかういふ場合に勘忍が出来ぬやうな事では役に立たぬでは無いか」と云ひ乍ら一首の歌を詠まれた、「打つ人も打たる人ももろともに、唯一ときの夢の戯れ」、これが無我の境界である、打つ人も打たる人も皆一時の夢の戯れであると諦めが附いたならば、斯う云ふ逆境に臨んでも泰然不動で決し

て顔色を變へ唇を振はし拳を握り怒りを漏すと云ふ様なことはないものである、國師は笑ひを帯びてかく仰せられる。其一首の歌に依つて流石のお弟子も腹立てる譯にもいかぬから漸く氣を静めて控へて居る。其の中に船は向ふへ着く。國師は向ふの河岸にて水を掬うて血汐の滲んだのを洗つて居られると、其傍へ來て頭を下けた者があるから能く見れば唯今の武士であつた、此武士は又何にか云ひに來たのか執心の深い奴ぢやと思召してお出でると、武士は頭を砂の上ですり着けて、「貴師は一體何れの御僧で在するか存せぬが、實に感じ入つたる尊きお方である。先程よりして粗言を申し上げたるのみならず、お頭に疵まで致したる無禮の段は御慈悲にどうかお許しを願ひたい。私はモウ佛法の信仰も無く神佛を信ずる事を知らぬ大惡

人で、貴師の如き名僧に向つてすら言語に絶えたる無禮を加へましたにも關らず、少しのお憎しみの無き様子は先刻の和歌を以つても解ります。實に私は徹骨徹髓懺悔悟を致しました。今日より御弟子の一分に加へて下されたい」と云つて涙を流してお詫に及び、到頭國師のお弟子に成つてしまつた、所謂無我に敵なしと云ふ所であらうか。

□無我になれとは馬鹿に

なれと云ふにあらず

只無我々と云ふても、頭を叩かれて、誰方でございますかといふやうな無我では困る。それでは人生に處しても丸で枯木のやうなも

のになつて了ふ。禪僧などでも唯無の一方になると人生を馬鹿にし
てしまふ。従つて世を利する活動が無くなる。事によると盲目坐禪
になつて、見識一方に傾き、殆ど非常識に陥いることがある、人間
界の階級に對しても、佛教では無論一如平等の理を説くが、それが
爲に人世の秩序を破壊する様なことはない。故に天皇陛下に對し奉
つては絶対に重々奉戴の誠を盡し、陛下の爲めには飽までも忠義を
勵みて報効の力を致すといふ、健全なる國民道德が平等の上から自
づと現はれて來ねばならぬ、何故かと云へば君は君たり、臣は臣た
りといふ差別の一方のみに執着しては上下心を一にすといふ眞の融
和は出來ない。階級の中に無階級の理が循環してこそ國家を維持し
且つ發達させてゆく事が出來るのであると思ふ。

佛教に説く所の、體、相、用と云ふことは其の道理を説明したもの
です體は本體で平等である、相は姿であるから差別。用は即ち作用
であるから平等差別圓融の妙徳である、本體は根源の理であるから
今日の哲學者でも之を説いて居る。故に理の一方のみを説いた丈で
は空論するに過ぎぬ。元來本體があれば必ず相がある。相があれば
必ず作るといふものが、必ず現はれねばならぬ。其作用が萬物の妙
徳であつて、之を佛事ともいふのである。春になると鶯がホウホケ
キヨウと啼て居る。ホケキヨウと啼いたからとて鶯そのものは別に
人を樂しませやうといふ様な考へがあるのではない。ホウホケキヨ
ウと啼くのは即ち鶯の天然自然の妙徳が現はれたので自然の禪機で
ある親が子に對する情も、子が親に對する情も亦天真の妙徳である

から、云ふに云はれぬ味のあるものである。其の根本は元來平等であつて其の平等の儘が即ち差別の働をして居る。而して其の差別の上には人間道德の標準なるものが現はれて来るもので、此れが平等即差別と云ふのである。此の根本なる無我を基礎として、商法を勵み禪の修行してこそ初めて成功する事が出来る。この無我と云ふのは身體の爲に囚れないと云ふ無我である、小さな欲望の爲に囚はれない我と云ふものを、詰り十分道の中へ入れて了へば、苦を打忘れて了ふ。商法でも佛教修行でも斯ふいふ遣方ではなければならぬ。

□心の持ち方一つ

随分若い人は覺えのあることだが、始めて地方から商店へ小僧に入

つた間に、何ぼ三枚敷きの尾羽打枯らした、淺間しい境遇であつても、親の側が居心地がよい。それが他人の中へ交つて、番頭さんに叱られ、主人に小言を云はれ、三度の飯を食ふにも、心配して食ふやうな身の上になれば、涙の溢れるほど辛いことがあるだらう。けれども其間が一步一步に尊い修行である。其の間に商機の妙道を修めて行くのである。番頭さんに使はれるのが面倒臭い主人に、叱り飛ばされるのが馬鹿々々しい、と思つたならば、何も出来るものではない、吾々にしてもさうである。道を修めて行くといふ上に於ては、如何なる困難にも堪えるだけの意志といふものがなければならぬ。それだけの決心さえシツカリして居れば、どのやうな困難にも打勝つことが出来る、天龍寺の峨山和尚は常に吾々が困つた顔付き

をすると、斯う云つて訓戒された。願心曠大なれば、富士山も米粒の如きものである。僅なことで心が變つたり、僅なことで悲觀するやうでは駄目だ。全くその通りである、矢張りこれは商業の道を修めて行く者も、左様だらうと思ふ。損をした時には落膽をするけれども自分の決心さへ堅ければ、百萬圓米粒の如し、壹千萬圓猶米粒の如きものである。さういふ考へを持つて行くから、如何なる困難に遭しても、易々とそれを通り抜けて行くことが出来る。それを何ども樂にやらうといふ横着な考へを持つて、樂なことばかりを望んで行けば、涙ばかり溢して居らなければならん。世の中で成功したと云ふ人は大抵皆艱難に打堪え得た人で、此の艱難に打堪えるだけの決くのある人は、大概世の中を面白く送つて居る。斯心の如く

艱難に打ち克つた人は過去を振返つて見ても、非常に愉快で、嘗て辛惨の涙をこぼしたことも却て一種の追憶の誇となる、之に反してその決心のシツカリして居らぬものは、僅の事にも、自己の本心まで取失つて全く淺ましい姿になり、平常の口先ばかりの勇氣にも似合はぬやうなお氣の毒な有様になる。事實上さういふ人は決して些くないそんなことでは駄目である。けれども斯う云ふ種類の人は永劫に成功することは出来ないかといふに、そうばかりでもない。何かの機會によつて發奮すると之に依つて一轉機を得、更に堅忍不拔な心を取返すことが出来る。岐阜縣の中津に松田屋といふ呉服屋があつた。これは木曾の馬込の極く貧乏な家の一人息子で繁藏といふ。親爺は獵師であつた。

何しろ家は貧しい獵師だから、親達は自分の名前も書けないやうな教育のないものだが、せめて子供だけは、どうかして田舎で暮させたくない、と云ふところから永昌寺といふ寺の和尚に、讀書算術を教へて貰つた。そして十一の時、中津の呉服屋に丁稚奉公をすることになつた。矢張り貧乏でこそあれ、十一の時まで親元に居つて可愛がられて居つた身の上だ始て人中へ出て修行するには、なかく辛い。番頭さんには辛く當たられ、主人には酷いことも云はれる。少しでも今までの氣を出せば人から憎まれる。それが、どうしても辛抱することが出来ないで、或夜ひそかに店を出て二里の山坂を越へて實家へ逃歸つた。あの邊は御承知の通り雪深いところだ、八寸ばかりの雪の中を一生懸命に逃げて歸つたが、さて、門口まで來れ

ばどうしても中へはいることが出来ない。家を出る時、しみぐぐ云はれたことがある。「立派な一人前のものになるか、暇を貰つて敵入りの時でなければ歸つてはいけない」、「歸りません」と云つて、堅く誓つた言葉の手下、今斯うして戻つて來たことが知れたならば、お父さんに叱られるのだらうといふので、門口に立つて泣いて居つた這入ろうか這入るまいかと思案に暮れてゐる内に、夜はだんぐと更けて來る、戸の隙から覗いて見れば、母親は一生懸命に着物を縫ふて居る、親爺は爐の傍に居つたが、「ドレこれから出掛けやうか」といつて、獵師のことだから、狩に行く支度を爲にかゝつた。すると、母親が、「こんな雪の降る寒い晩は休んだ方が宜いでせう」と云ふと、「イヤ、さうではない、此間も中津へ行つたなら、繁藏が店

から、風が吹くの荷物を持って使に行く所、俺の姿を見て涙を溢した、なか／＼商法で一人前になるのは一通りのことでない、繁藏のことを思へば、親の俺は、どうして愚圖／＼して居ることが出来る、やう、悴の罰が當るからどうしてもこれから出掛けることにする、
「そうでしたか、そんなに繁が寒い思をして居るのに、私がジツとして居る譯には参りません。私も今晚夜通し致しても洗濯物を早く縫つて、綿入にして持つて行つてやりますから、お前さんは狩に行つて来て貰ひませう」といつて、親爺は狩の支度をし、母親は縫物に餘念がない、外で聞いて居た繁藏、胸が一杯になつて、どうしても中へ這入ることが出来ない、「これほどまでに、お父さんやお母さんが、自分のことを心配して下さるのだ、一人前にして貰ふといふこ

とは容易なことでない、少々叩かれたり、叱られたりする位で、腹を立てゝは勿體ない、出来るだけのことは辛抱をして早く一人前になつて、親達に安心させなければならぬ」と思つて、到頭其の門口から引返した如何にも啐啄同時の機じや。それからと云ふものは、簞入にさへ家へ歸らうとはせずに辛抱をした。それから、名古屋の支店の方へ出て更に悲しい思をしたが、その時のことは今も忘れませんといつて主人から話をした。今では五六人の人を使つて、安氣にやつて居りますが、實際、商法家にしても、吾々僧侶にしても、樂なことでは大機を體得することは六ヶしいのだ。

□ 修養を積み

今日では、實際頭を叩くとか、叱りつけることはあるまいけれども、商法の道を修めて商業の立機を體得する一通りの修養といふものは、積まなければならぬ。修養といふものは、善良なる美しい精神を養ふと云ふことである。だからその點に於ては禪機の修行も、商機の修行も、その機を一にして居る、何れも至誠流れ出て活動する精神を養ふといふ點に於ては一つだ。どちらにしても、一通りも二通りも修養しなければ其の域に到ることは六ヶしい、只樂にして居ていける筈はない、然るに、今の四ツ手のランプの中へ落ちた虻のやうに、ブブ、ブブ、此方へ行つてもブブブ、彼方へ行つてもブブブ、向ふへ行つてもブブブ、大阪へ行つてもブブブ、東京へ行つてもブブブと云つてゐるやうでは、それでは駄目だ。艱難に堪え得るだけ

の元氣を養つて、寒中に水泳をするやうな勇氣がなくては、所謂、町人臭い味ひのある人にはなられまいと思ふ。これは何事でも皆さうである。寒稽古の武士道ばかりではない、商法家もさうである。寒い時に寒いといつては、寒さに恐れ、暑いといつては暑さに恐れ、てゐたならば、年中仕事をする時はない。寒いといつて炬燵にもぐり、暑いといつて蔭ばかりを捜して居つては際限がない。そんなこととどうして仕事が出来ものか、何事にしても、さう樂なことがあるものでない。一體、暑いといつたり、寒いといつたりすることは、こちらが勝手にいふことで、向ふから暑いぞ、そら寒いぞといつて來るのではない。寒の入りとは書いてあるけれども、寒の入りが寒いぞとは書いてない。こちらから寒いと云ふのだ、土用の入り

とは書いてあるけれども、暑いぞといふことは書いてない。こちらから暑いと云ふのだ。だからこちらの心の持ちやう一つでどうにでもなるものである。自分の決心一つに依つて、酷熱の土用でも春の様な心地で暮すことが出来る。寒いといつて困つて居る時でも、秋のやうな気分で暮すことが出来る。要は自分の心一つだ。決心さへ堅ければどうにでも商機禪機の機關が運轉自在に動くものである。全く商法家の活機も、禪道修行者の活機も玄妙の玄機は同じことである。もう一つ言葉を換へて商機禪機の機關の運轉活動の線路から云へば道だ。道は兩者共通のものであるこの意味から考えると、行誠上人のお歌にもある通り、「梁傳ふ鼠の道も道なれど、誠の道は人の行く道」實際、鼠の行く道も、鼠の這ふ道も道は道であるけれど

も、誠の道だけは人が行くのである。又ある人の歌に

「武藏野のあちらこちらに道あれど、わが行く道は神の正道」。又、後鳥羽天皇のお歌に、

「奥山のおとろが下もふみわけて、道ある世ぞと人に知らせむ」。何れも同じ意味である、要するに、道は同じであつても、その人の力次第によつて、近くこれを得ることも出来れば、遠く求めても得られない場合もある。

金儲けの道を行くのも、捷く行く人は早く儲かる。愚圖々々して居る人は一度は儲かるかも知れんが矢張り鈍い。何れにしても商人が金を儲けるには、先づ算盤をやつて、商業の懸引をやつて、それからでなければ、確實なところは分らないのだ。故に儲かる道はあ

るけれども、捷つこい活機輪の轉ずる人は、愚圖々々して行く人よりは餘程上手に行く。捷つこく上手に行くものには、又、運の神も助けて呉れる。けれども、鈍い奴はいつでも貧乏神と同じところに居る。此の兩般に於ける去就は平素その修養が大切であると云ふことを遺憾なく立證する。奥山のおどろが下をふみわけて、自分が運命を開拓する積りで、道を開いて行かなければ駄目だ。「道は近きにあり」「金は近きにあり」と云ふてウカ／＼さがして居つたつてありはしない。こちらが開いて行くのである。故に、お互商法家にして、佛道修行者にしても、この大機を轉じて行くには、堅き決心を持つて、どんな困難な道も切開いて行くといふ氣勇がなければならぬ、勇氣があれば、如何なる困難な道も、険しい道も易々として行

くことが出来る、實に茲が大切なところである。即ち、一方に宗教的の佛道の力に依つて精神に満足を與へ、一方社會に立つては慊らんほどに、進んで行く。斯ういふ調子に行けばいつかは、禪の機に投じ商の機に投入することが出来るものである。

□ 足ることを知れ

さて一面には、佛敎でも云ふやうに知足といふことがある。今日は十日で夷さんである。夷さんは福を授ける神様だからといつて西宮へ參つたとして福のかたまりを授かる譯ではない、西宮へ參つたつて弗箱の落ちて居る筈もない。そう云ふ淺薄な考では西宮の夷に限らず、何處の夷さんへ行つても福を下さる筈はない。要は夷様の精神

を授かり自己の修養に資するのが肝心である。即ち清廉寡慾足るを知るといふ夷さんの精神を自己の精神として事を行ふところに無限の福德が授るのだ。

□ 不満の習慣

吾子の悪徳てふ書物に何に付けても不満足で、いつも不平ばかり云つて妻や子供にまでも不平を云ふ事を教へた談がある。自分ほど不仕合なものは日本に二人とない。世間の人は羨ましいものだ、常に他人の境遇を褒めちぎり、子供の注意をも其の方にはかり向けさして居る。「食時の時などには家ではこんな不味いものを食べて居るが、誰某の處では、鯛の吸物だの、鰻の蒲焼などを毎日食べて居る

んだとうだい羨ましい事ぢやないか」と折角の食事もこんな風にして不味くして了ふ。又美しい衣服を着飾つて居る女子などが、店前を通れば、直ちに子供を呼んで、「とうだい、あの子は綺麗な着物を着て居るぢやないか、あれはお前、大變高價なものだ。あの帯だつて十圓や十五圓は出て居んだよ。其處へいくと家の子供は可哀想だ情ないことだ、お前達にも宜いものを着せたいと思つては居るが、着せる譯にいかないんだ、あゝ羨ましい譯ぢやないか。」と

又、向ふから俥に乗つて來る人を見ると、
「金持ちにはなりたいたいもんだね、本統に金持ち程結構なものはない、御前達は不仕合だから、自分の足で歩行かなけりやならない、残念ぢやないか」と云ふ。

又割烹屋などで客が何か旨さうなものを食べて居るのを見るも。「御覧、あの料理は大層旨さうだ、だが阿父さんはお金がないから、御前達にあんな御馳走をする事は出来んのだよ」とこんな風でいつも不平不満で日を送る中に子供までが、いつの間にか如何なる事に遭遇つても、更に愉快といふ事を感じない様になり、日々快々たる不平の雲に蔽はれて、遂に憂愁な世界から、更に暗黒な死の世界に移されて終るのである。小慾、即知足の所に人生の満足と云ふものはある、何かボロイことがないかと、腕を組んで考へても福の授かりさうな譯はない、この慾の少ないところに幸ひを與へるといふのが、詰り夷様の精神である。夷様にどんな大きな鯛を上げたところで、百萬兩の金を上げたところで、幸ひが授かる譯のものではない

けれども、この慾の少ないところに何とも云へん幸ひと云ふものが得られるのである。總て學問にしても藝術にしても無慾の處に大切な所があるのだ。

我が禪の修行をして禪機に投入せんと欲するならば特に無慾でなければ出来るものではない。書を學んだ金儲けにしよう、早く人に譽られよう、學問をして金儲けにしよう、人に賞められようと云ふのでは、成功も熟達もするものでない、たとへ巧妙に出来ても其の畫は何んもなく卑しい所があり、其の學者は人格のない人であると思ふ。

我が禪宗で名高い鐵翁禪師は、清客江稼圃と云ふ畫伯の門に入り、悉くその傳を得、山水花卉ともに妙技に達し、その中でも蘭は天下

に名高くなつて、就いて書を學ぶ者が幾百人の多きに及んだそうであるが、鐵翁和尚其書を教へる前に、必ず垂示していはく、汝ら須らく錢舜舉の謂はゆる、「要得無求於世、不以毀譽撓懷」の語もてその座右に銘せよ。胸中一點の俗氣を留めずして、能く修練する時は、必ず心手自然に圓熟して遂にその妙に達することを得べし。是れ則ち明來りて闇去るの道なり。と乘示して、それからでなければ決して書を教へなかつたと云ふ、尙畫家その人の心操を向上せしむるために楞嚴、維摩、碧岩、又は東波の禪喜などを讀むことを勧めたと云ふ事である。

鐵翁和尚の爐屏に題する語に斯ふいふ事がある。「正直にして天理に通じ、慈悲を以て能く人に施す、無欲にして足ることを知る、平日

行事正しくして邪なく、物を愛して執せず、俗塵凡情、一點もなき之を古人の風流と謂ふ。世の雅人、今時一人も有るとなし、故に門を閉て人の來訪を許さず、我徳名の高きなし。適意を養ふに拙を以てし、天然を了せむと欲する事、我人の師と爲らず、人我を學ぶは即ち狂人なり。人我が狂を學びて我が心を學ばざるが故也。謂はゆる禪機に投じ宇宙の一大眞理を體得し一點の邪もなく欲もなくなつて初めて畫の妙にも達せられ、成功も熟達もするのである。ひとり學問、美術のみならず商業にしても商機即禪機を達観しなければ成功するものではない。

日本の鑛業を建設された古河市兵衛氏の商機を體得された徑路を考へて見るに、彼は京都近在の岡崎村に生れた、彼の家は代々庄屋を

勤めて居たのである、祖父の時代には、相應の財産があつて、酒造業を手廣く爲つて居たが、彼の父は非生産的人で、仁俠な肌合であつた爲めに、財産をのこらずつかい盡して、豆腐屋に轉業した、古河市兵衛氏は、此の貧しい時代に、次男として生れたので、物心が付く頃から、貧乏の味を嘗めさせられた。其の上繼母の手にかけて随分、苦められ、九歳から丁稚奉公に出されたのである。此の小僧時代には、三食共、薄い粥ばかり啜らされたと云ふことである。十一歳の時、家に歸つて、眞面目に豆腐を賣つて歩き、十八歳迄は無名の一少年として、平凡な貧しい生活を送つて居た。けれども此の時代にも流石に彼は無自覺の状態に彷徨せず、發奮の動機を見逃さなかつた事は、他の平凡の少年と異つて居た。彼は學問は

皆無で、小器用な處もない。又小才の利く所もない。こんな點から考へると彼は無能で、鈍物であつた。けれども此の鈍物たる所が、彼の偉大な所で、彼が少年時代に、主家の命を受けて、進物を持參した時、肝心な挨拶の言葉を全然忘れて了つて、それを誤魔化さうとはせず、先方の人に、「途中で忘れて了ひました」と正直に云つて除けた事がある、少年時代の根性は或程度迄變化するものであるが彼の正直な根性は、大人となつてからも、變らなかつたと云つて彼は馬鹿正直ではないが、小精巧に嘘を云ふことは出来ない性分であつた、彼が實業界の大立物となり得たのも此の正直に負ふ所が多い又彼は根氣力が非常に強かつた。世間には、可なり根氣の強い人があるけれども、彼の根氣力は、無際限な程、量に於ても、質に於

ても大きさと幅とを持つて居つた。それが少年時代から一貫して、益々鐵のやうに頑強なものとなつたのである。彼が叔父の代りに賃金の取立に出かけて、三日間、圍爐裡の側に居て、昆布を喰べ乍ら居催促を續けて到頭、五十兩の金を受取つて歸つたと云ふやうなことは、非凡の根氣力がない以上は、實行し得ることは出来ない。此の根氣力を以て鑛業に従事したのであるから、鑛業が如何に困難なる、事業にしても、彼の根氣には、征服せられざるを得なかつた。遂に彼は此の大根氣の爲に商機に投入したのである。我が禪宗に於ても宇宙の大機に投入しようとするには、此れ以上の大根氣なければ、到底眞理を體得する事は出来ない。大徳寺の開山大灯國師は五條橋下で乞食の内に入つて二十年間修行せられた。其の御弟子であ

る妙心寺の開山關山國師は、修行成熟の後、伊保の山中に入つて、百姓と共に手をひいて七年の間聖體長養と云ふて悟後の修行をせられた。其の他一宗一派の開山とも祖師とも云はれる人は、三食とも薄い湯ばかりの粥を啜つて、二十年三十年と大苦心をして、漸つと宇宙の一大眞理を體得されたのだ、實に大根氣でなければ商機にしても禪機にしても捉へる事は出来るものでない。

或時、市兵衛が白川村へ豆腐を賣りに出かけた際、知人某が向ふから駕に乗つて來たのと衝突した、其の爲め豆腐は滅茶々々になつた乃で「如何して呉れる」と掛合ふと、先方は、却て彼を侮つて、「貴様が悪いのだ」と極め付けて、到頭之を辨償しなかつた、此の事が大變彼を刺戟した、「先方は他人に迷惑を掛けて置き乍ら、却て叱り飛

ばして行き過ぎ、自分は迷惑を掛けられ乍ら、黙つて引込むで居なければならぬのは、畢竟、商賣が卑しいからである、逆も斯う云ふ事をして居たら、頭が上る時がない、何とかして世の中に出て、相當の人物になりたい。是非ならねばならぬ」と發奮した。泉聲、中夜の夜山色夕陽の時所謂啐啄同時の機に投じたのだ。自來、彼は鞍馬の毘沙門に、月參りをして、立身出世を祈るやうになつた、此の發奮が、彼の生涯に、大なる影響を及ぼして居るのである。

十八歳の時、岡崎村を出立して、盛岡の叔父木村利助の家に至つたのは、開運の動機であつた。此の時代彼は叔父の爲め、眞面目に働いた。三日間、貸金の居催促をしたのは、其の時分の事である。又山本某へ貸金五百圓を取立てるため、嚴寒の頃、親不知子不知と云

ふ危険な海岸を徒歩して、怒濤と積雪とに生命を失はんばかりの目に逢つた事さへある、此の危険を冒して、彼は、無事に其の使命を全うした、斯う云ふ風に、彼が根氣宜く眞面目に働く様子が、古河太郎左衛門の眼に留つて、養子に貰はれた、此の太郎左衛門は、既に三人の養子を貰つたのであるが、少し氣むづかしい點があるので三人共、失敗に終つた。四人目が市兵衛である。流石に辛抱強い市兵衛は、此の氣むづかしい養父の試験に何の落度もなく及第した。而して養父同様、小野組の店員となつたのである。彼が實業家としての経験も、手腕も、此の間に鍛鍊されたのだ。彼が一旦鑛業を終生の事業と決心してからは、一直線に突進し、鑛業を中心點として働き、遂に商機を體得し實業界の大成功者と成り遂げたのである。

商法家が商機を體得するも、佛教者が宇宙の眞理を體得するも眞理に於ては違がない。只儲かりさへすればよいと云ふ様な利慾ばかりに迷ふて居る人は、決して金儲の眞理即商機に投ずる事は出来ない。上は陛下の御爲め、下國民の利益を圖らんが爲と、商法の道を行くといふ決心を持つて行けば、根柢のある楽しい生活をする事が出来る。左様な決心で以て商法の道を辿つて行くなれば、設令少し位の損失があつても、平氣で居ることが出来る。利益と損害とは時の運であるからそれは已むを得ない。只謙の徳を以て、一方佛道の修行によつて、無我の根柢から割出して行きさへするならば、自然にその目的が達せられる即ちいつかは必ず商機即禪機に投入し一大成功をする事が出来るのである。

□ 成功の秘訣は學問上にて得らるゝものにあらず

禪宗にしても商業にしても成功の秘訣の多くは、文學上や學校などで教ゆる事の出来ないものが多いのである。故に青年たるものが、商業學校を出た、高等商業を卒業したと云つて、それで以て成功的徑路を創むるに必要な資格を養ひ得たりと云ふ事は出来ない、世上には手勢、常識等に伴へる人的吸引力、方法、機敏などのどうしても記述の出来ない一種微妙な性質がある、此れは學校や文字では修める事は出来ないが、大事業の成果は主もに此の諸性質から生れるのである。寫眞師でも之れを寫す事は出来ない。傳記家も之を記述

する事は出来ない。けれども成功には之が尤も必要なる條件である。年々商業學を研めて高等の學校を出るものは頗る多い。此等の人は商法の原則に通曉し、商法人として縦横の辯を弄する事は出来るけれども、而も商法家として失敗する所以は、正當な時に正當な事を行はねばならない。或る説明する事の出来ないものを缺いて居るからである。多數の人が商法家として失敗するのは、第一に圓満な人でないからである。彼等は、書を讀み商法の原則にも通曉して居るが人をして成功せしむべき前述の性質を帯びた徳性を缺いて居る故に一家を支持し業務を經營して行く上に於て多大の困難を嘗めねばならぬ。禪宗の修行などに能く言ふところの水を呑んで冷暖自知でなければ、眞の水の味、即ち禪の妙味は得られない、如何に砂糖が甘

いと云つた所で、砂糖をなめた人でなければ其の甘きを知る事は出来ない所謂禪機に投入せなければ禪味は知る事が出来ない。商法家にしても同様學問上ばかりでは商法の手勢と云ふものは得られない。實驗して初めて其の手勢即ち商機と云ふものを體得する事が出来るのである。故に須らく實際に當り冷暖自知して、好機會を捕ふるだけの能力を養はなければならぬ。

□ 大 事 業 成 功 の 動 機

大 事 業 成 就 の 動 機 と 云 ぶ も の を 考 へ て 見 る に、 世 界 に 於 け る 大 事 業 の 殆 んど 總 て が、「 必 要 」 と 云 ぶ 嚴 格 な 刺 激 の 下 に あ つ た 人 の 手 に 成 功 せ ら れ た 事 は 最 も 著 し い 事 實 で あ る 。 之 に 反 對 に 事 業 と 云 ぶ も の

困難に苦しんで居る様な人や、又は必要でふ刺激の下に居ない人に依つて爲された事は殆んど稀である。容易であつて、生活の苦しみを知らないと言ふ様な人に於ては自然に其の精力を抜き去るものである。「必要」と言ふ事は勉強以外に奮勵を招いて、雷に其れを持久的たらしむるばかりでなく、一時たりとも愉快を來たすものである。「必要」と言ふ人生の刺激が漸く影を隠す様になれば、人は前日よりも生活の方法に於て漸次容易なる事を感じ、前日の様に事業に固着して頑強に奮勵せなくともよいと云ふ考へを起すものであるが、此れが商法家として事をなすもの、一大危機の伏在する時であろうと思ふ。吾禪僧も亦然り。此の時、此の刹那こそ、鞏固な決心、偉大な忍耐を以て、彼の、「必要」の刺激の肉薄し、希望の光明の前途に

横はつて居る時と同じ氣力と勇氣とを以て、猛斷決行する勇猛心がなければ禪機を捉へることは出来ぬ。商機の體得も亦然りで、此の危期の一刹那に大自覺と大勇猛心を起さざれば竟に恢復すべからざる苦境に墮つるに至る。凡そ人の精力は先天的に大きいものもあれば、又小さいものもあるけれども如何に天才と雖も其精力を、收めて置いて使用する事を怠つて居れば、其の材を伸すことは出来ない。之に反して如何に鈍才者と雖度々此の才を使用するならば、必ず或る程度までは發達させる事を得るものである。彼の一藝一技に専らなるもの、其の技術に驚くべき微妙の域に達するのによく見る處である。必竟是れは同一の事に専一なりし結果である。「カーライル」曰く「最も弱き人も一

の目的を定めて全力を之に集注せば如何なる業にても之をなし能ふ
 反^{これにはんしつと}之^{つよ}最も強き者と雖も其精力を多事に分散して使用すれば何業に
 てもなし能はざるなり。」と彼の滴々たる水も其墜つる處を違へなん
 だならば、堅固なる岩石をも尙ほよく穿つ事が出来る。けれども、
 急湍激流其聲雷の如きものでも、一點に向つて奔突することがなか
 つたならば何等の痕迹をも岩上に留める事は出来ない。故に世に名
 を成さんとする程のものは、自己が天稟の才能に適應せる事業に向
 つて、宜しく惜む所なく満幅の精力を集注せねば目的を達すること
 能はぬ。苟も一疑でも其の間に生じ、一毫でも不安の心があれば、
 其の爲に活力を根抵から弛緩してしまふに至る。
 そうして其の精力集注の秘訣は心行一致にある事を忘れてはならぬ

孟子曰く「此に二人の學生ありて同じく讀書を習へりとするに、一
 人は餘念なく全精力を集注して之を學び、他の一人も同じく學ぶと
 雖も、其の心に思ふ様、今日は天氣もよし野に出でて空飛ぶ鳥を狩
 りすれば、嘸ぞ面白からうと、一日かくの如く、一年かくの如く、
 十年かくの如くば如何」と。すべて一事業を成功せんと思ふならば先
 づ第一に其の全力を捧げなければならぬ。若し酒造家たらんと欲す
 れば則ち、全力を酒造業に注ぎ入れるのである。所謂禪宗でよく云
 ふ公案三昧にならなければ駄目だ。其の時始めて日本第一の酒造家
 たることを望むべきである。酒造家にも焼芋屋にも又呉服屋にも轉
 業する様では到底大成功は六ヶしいと思ふ。成功の秘訣は一に此に
 ある。惟ふに我が商人にして、始から商機即禪機を達觀して實業に

從事して居る人は必ず大成功の人であると思ふことができる。如何に商機を體得せん、泉聲中夜の後、山色夕陽の時である。如何が、禪機を體得せん、泉聲中夜の後、山色夕陽の時である。

商機と禪機終

大正十四年九月二十日印刷
大正十四年十月五日發行

定價金九拾錢

不許

複製

著者 間宮英宗老師

發行者 淺井勇助

印刷者 大谷末吉

大阪市北區東梅田町二十番地

泰山堂書房

電話北三三四七番
振替大阪二一二三六番

大阪市東區農人橋松屋町北入

文翫堂

電話東二二四九番
振替大阪一六二六〇番

同

發賣元

533
103

終